

障害のある子どもたちの教育環境が大きく変わりつつある。宮城県は障害児も通常学級に通う「共に学ぶ教育」を掲げ、支援対象を軽度発達障害まで広げたのは一人一人のニーズに応える特別支援教育の方針を打ち出した。宮城を舞台に、転換期を迎えた障害児教育の現状と課題を探る。

通常学級に通う

教室のあちこちで、にぎやかな話し合いが続く。十月中旬、仙台市太白区の西中田小。二年二組では、班ごとに校外学習の係を決めていた。

母親の負担減る

西中田小は桃子さんのした専門指導を受ける場には、桃子さんの移動を手助けする車いす係の名前が書かれている。「初めはびびりした。今は一緒に遊んでよ」と桃子さんが笑ってくれると「自然に融れ

点から、後藤教諭の介助を受けながら歩いてゴールした。

互いにいい影響

通常学級に籍を置いて七カ月、二年二組の黒板

温かい仲間、教員に囲まれて、桃子さんは小学校人だけのモデル事業が生活を楽しむ。「意欲やつきり根付き、希望した顔つきが変わった。桃子

小学三年生の日君は「手のかかるとして名前が挙がっていた。授業中に歩いて教室の外に出てしまい、教師の指示もまったく聞かない。

感想募集 「教育の住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。ファクスは0222(211)1256。電子メールのアドレスはnukun@po.kahoku.co.jp」

担任とスクールカウンセラーは、日君が歩きそろう雰囲気を感じたら、「〇〇先生に届けてもらえないかな」と言って封筒を渡し、保健室や職員室などへ用事を頼むことにした。用事を済ませると、大げさに褒めた。日君はお使いに行ったら後はすんなりと席に着くようになり、出歩くこともなくなった。

宮城 変わる障害児教育

第1部 将来構想の波紋

学校全体の支え重要

昨年末に中間案が発表され、今年七月に策定された。

構想具体化の第一歩として県教委は本年度「学習システム整備モデル事業」を始めた。桃子さん

「桃ちゃん、どの係がいい」。周りの児童が声を掛けると、高橋桃子さんへは柔らかな表情で見つめ返した。

桃子さんには知的、肢を不自由の重度障害があっても通常学級で学べる環

① 共に学ぶ



昼休みにクラスメートと遊ぶ高橋桃子さん(中央)。副担任の後藤雅子教諭(左)がさりげなくサポートする。仙台市太白区の西中田小

間、「十分な人員配置があつてこそ、今の教育が実現できた。継続性が大切だ」と指摘する。実和子さんも「手厚い支援がなければ、地域の学校が

「十分な人員配置があつてこそ、今の教育が実現できた。継続性が大切だ」と指摘する。実和子さんも「手厚い支援がなければ、地域の学校が

「十分な人員配置があつてこそ、今の教育が実現できた。継続性が大切だ」と指摘する。実和子さんも「手厚い支援がなければ、地域の学校が

教育